賢治童話における殺生の問題

――田中智学『本化妙宗式目講義録』を手がかりに――

牧野静

序

宮沢賢治（一八九六～一九三三年）はその童話処女作とされる『蜘蛛となめくぢと狸』にはじまり、生き物の殺生を行う人物をその作品上に配置することが多い。『よだかの星』の主人公よだかや『なめとこ山の熊』の主人公である熊撃ちの小十郎等、生きる為に殺生を行うことに苦悩する主人公も、賢治の童話には繰り返し登場する。賢治自身も一時期には菜食を行っていたことが広く知られており、殺生、肉食の問題が彼にとって切実な主題であったことは疑いようがない。この問題に対する賢治の並みならぬこだわりの淵源を探ることは、その思索の軌跡を明らかにする上で非常に重要な作業となる。

賢治の殺生と肉食にまつわる問題意識のおおもとに仏教信仰があることは既に諸家に指摘されている。本稿ではより具体的な検討を行うため、賢治が五回は通読したとされる田中智学『本化妙宗式目講義録』[1]（以下『妙宗式目』）に注目する。賢治の童話創作開始時期は智学への熱烈な信奉を表明したのとほぼ同時期であるが、『妙宗式目』には芸術を教化の方便として強調する箇所もあり［一・六八～六九］、自身の創作を「法華文学」と表現した賢治の創作の動機とも深くかかわる為である[2]。それゆえ本稿では賢治が教化芸術とは別の箇所からも影響を受けていたという仮説のもと、『妙宗式目』における肉食にまつわる智学の主張を確認する。次に賢治の『蜘蛛となめくぢと狸』、『ビヂテリアン大祭』との比較を行うことで、智学の影響とその限界を探る。

これらの検討から、賢治が創作上で繰り返し問い続けた殺生の問題の射程を明らかにすることが、本稿の目的である。

一、田中智学の肉食批判

この節では『妙宗式目』における肉食への批判を検討すること

で、田中智学の肉食に対する考えを明らかにし、賢治のテキストと比較する為の材料とする。

考察に入る前に、賢治と智学の邂逅をおさえておく。賢治は一九一八年二月末から妹トシの病気看病のため母と共に上京し、翌一九一九年二月まで滞京するが、この際に田中智学の講演を聴講している。また一九二〇年一二月二日付保阪嘉内宛書簡では日蓮と同一視するほどの智学への熱烈な信奉を表明している［十五・一九五～一九六］。一九二一年一月に出奔・上京し鶯谷の国柱会館を訪ねた際のことは「高知尾師ノ奨メニヨリ／法華文学ノ創作」［十三・五六三］として賢治の手帳に記されている。これらは賢治の創作の動機が智学の芸術論になんらかの影響を受けている証左である。実際に賢治の創作の動機が智学の提唱する教化芸術と密接に関連することは先に挙げた国柱会幹部高知尾自身によっても回顧されている(3)。動機の点以外の智学からの具体的な影響を検討する為、以降は智学が肉食について述べている部分を『妙宗式目』から抽出していく。

智学が肉食の点から批判する対象として、最も頻度が高いのは既存の日蓮宗の教団である。「安楽行品は行はれない、却つて肉食妻帯だけは盛に行はるるに至ツた」［三・一三六六］「優陀那師が極力、排斥した、肉食妻帯などは平気でしている」［二・一四二〇］等の記述からそれが窺える。また既存の日蓮教団に対する批判よりはるかに頻度は少ないものの、牛肉を食す禅宗の僧侶のエピソードを紹介する［二・九〇二］などし、当時の日本の教団全体に攻撃を加えていく。

智学が肉食を批判点とする根拠は二つある。ひとつは涅槃経等の大乗経典において肉食が厳しく戒められていることとの矛盾であり、もうひとつは輪廻転生観に基づいて他の生き物を食すのは人間を食べるような恐ろしいことだという主張である。以下にそれをあらわす部分を引用する。

涅槃經に、垂んとしたるとき、更に語を改めて、

「善男子我レ今日ヨリ諸ノ聲聞ノ衆生ノ肉ヲ食フコトヲ許サズ」

と大なる訓誡を下された、動物の肉を食ふという心は洵に残酷にして無慈悲なものであるからこれ許すべからざるとして根本的に折伏を加へたまひしものである、この思想は何を意味するや、これ大慈大悲の程度が、小乗の比較し得べからざる深遠廣大なる點まで、進歩したからである、もともと一切衆生は同類である、おなじ感情あるものである、おなじ感情の同類の肉を食ふという心は、これ漸々に人間をも養ふ食人鬼となるべき下地である、現今の世の如き牛馬のやうなものまで殺して甘いからとて食ふ、この心はやがて自分の親や子をも食ふ心である、實際にはまだ食うて居なくツても、佛の御眼より見たまへば、老たる親や、頑是ない亦子をも食ひ

かねないほどである、そこで佛は大乘においては、肉食を厳しく誡められたのである、即ちこの戒は、萬物はこれ吾が一身なりとする大観解から出る大慈悲である、これより見るときは、大乘に肉食を重く厳誡ることは、自己よりも他を救ふに重きを置く傾向を見るべきである、（後略）［三・一二九～一三〇］

ここで智学は大乘が小乘に優越すると強調する文脈で、大乘において肉食が厳しく戒められるのは輪廻転生観に基づくこと、またそこから「自己よりも他を救ふに重きを置く傾向」が導出されると述べる。ここで描き出される輪廻転生観と肉食とを結びつける発想は、賢治が菜食を表明した一九一八年五月一九日付の保阪嘉内宛書簡を連想させるものである。それを以下に引用する。

酒をのみ、常に絶えず犠牲を求め、魚鳥が心尽くしの犠牲のお膳の前に不平に、これを命とも思はずまずいのどうのと云ふ人たちを食はれるものが見てゐたら何と云ふでせうか。もし又私がさかなで私も食はれ私の父も食はれ私の母も食はれ私の妹も食はれてゐるとする。私は人々のうしろから見てゐる。「あゝあの人は私の兄弟を箸でちぎった。となりの人とはなしながら何とも思はず呑み込んでしまった。（中略）」私は前にさかなだったことがあって食はれたにちがひありません。［十五・六九］

賢治はこの書簡であらわしたように、輪廻転生観に基づき、人間以外の生き物が人間と同じような思惟や感情、肉親への情を持つという鮮やかな想像を行う。書簡の時期的にも智学からの影響であった可能性を指摘できるものである。

ただし智学は文脈によっては動物への同情を全く説かない。それを示す箇所を以下に引用する。

されば肉食の前に、食はれる肉よりも食ふ人間の価値が先づ問題である、此の如く観察して、此身に大法護持の浄業懸かれり、此身に精力余りあれば、ます〳〵この法華の大法を弘通するを得となるとき、薬用で喫する牛羊魚鳥の肉は直ちに法華行者精血と精気となりて此法を護持して、肉はさながら法華経化するのである、（後略）［三・一三〇］

智学は法華者が精力を養う場合の肉食には肯定的であり、食われる肉となる牛羊魚鳥の命と法華の行者である人間の命との間に明白な価値の優劣を設けるのである。

智学の肉食批判は既存の日蓮教団を筆頭とした当時の日本仏教界に向けられたものであり、その根拠は涅槃経との矛盾や輪廻転生観に基づくものである。ただし法華者の肉食を肯定している

ことから、その主眼は国柱会が日本の既存の教団に優越すると強調することにある。これらを踏まえ、次節以降では智学の主張と賢治のテキストの比較検討を行う。

二、『蜘蛛となめくぢと狸』における智学の影響

この節では賢治の童話処女作とされる『蜘蛛となめくぢと狸』［八・五～一八］に注目し、この中の狸の造形等が『妙宗式目』に着想を得ている可能性を検証する。

この作品は蜘蛛となめくぢと狸がそれぞれ他の生き物を騙すなどして捕食したのちに、報いのような仕方で死を迎える様子を描き出すものである。この中でも特に真宗の僧侶のカリカチュアであると指摘されている(4)狸は、ひもじさを訴える兎や説教を聴きたがる狼を騙し、念仏によく似た「念猫」というものを唱えさせ、大人しくさせている間に食ってしまう。

先に登場する兎はひもじさを訴え「もう死ぬだけでございます」と訴える。対する狸は「さうぢゃ。みんな往生ぢゃ。山猫大明神さまのおぼしめしどほりぢゃ。な、なまねこ。なまねこ。」と返答する。これは厭離穢土欣求浄土の態度を揶揄した応酬であると解釈できる。娑婆即寂光土の考えに基づき対社会的実践を強く打ち出していた智学(5)にとって、このような他界志向は以下のような激しい批判を加える対象となっている。

（前略）若し彼の説を正直に進めたならば、善導のやうに自殺をするべきもので、本山に自殺局を置いて、自殺法研究學校でも作るが至當であるのだ、この世が穢土だから往生する、それには念仏爲本だといひながら、王法爲本などゝいうて世を偽ツて居るのは、これ沐猴冠の類で、狸に法衣着せたやうなものである、（後略）［一一・九〇三］

智学は真宗が他界志向の教義を持ちつつ、為政者の法や世間の慣習との折り合いを唱える王法為本説も唱える点の矛盾をつき、激烈な批判を行っている。

次に狼が説教を聴こうと訪ねてきたとき、狸はこの狼を脅す。まず「お前もものの命をとったことは、五百や千では利くまいに、早うざんげさっしゃれ。でないと山ねこさまにえらい責苦にあはされますぞい。」と畳み掛けることで怯えさせる。さらに「わしは山ねこさまのお身代りぢゃで、わしの云ふとほりさっしゃれ。」と命じ、抵抗を封じた上で捕食する。真宗の教義は徹底した自己の悪性の自覚を促し、すべてを阿弥陀如来の他力のはからいにゆだね、一心に念仏するというものであるが、智学はこの他力本願の態度にも批判を加えている。以下にそれがみられる部分を引用する。

彼の眞宗のごときは、たゞたのめ〳〵主義で、絶対的に自力を却けて、念佛の修行で救はるゝ、念佛すれば救はるゝと考へてはならぬ、弥陀に帰依した時にすでに救はれて居るのだ、以後は報恩の念佛である、一分の自を出しては救に漏れるとやうにいふ、巧は巧であるが、（中略）自心に薫然せる力をば没却せんとするものである、（後略）〔二一・九〇一〕

他力本願を説く真宗の教義に対し、智学は自力を没却するものだとして批判を加えている。賢治も悪性の自覚から他力本願へとみちびく教えを風刺する目的で、この狼と狸の応酬を描き出したと解釈できる。以上から、兎と狸、狼と狸の応酬は、それぞれ厭離穢土欣求浄土、他力本願についての智学の批判を受けて造形されたと考えられるのである。

狸が兎や狼の肉を食らった点にも注目できる。先に紹介したように、智学は僧侶の肉食妻帯について批判を浴びせている〔二一・一三六六〕。この作品で他の動物ではなく狸がカリカチュアとして選ばれた理由も、先に引用した智学の真宗批判において真宗の僧侶が「法衣を着た狸」と表現されていることと関連するだろう。

以上から、智学による真宗批判、旧教団批判の表現が賢治の念頭にあり、智学の影響のもと肉食の点から真宗批判を行う為に狸を造形したと考えられるのである。

ただし智学が肉食を批判する際に最も問題としたのは、先に引用したように既存の日蓮宗のありようである。特に真宗と肉食を結び付けてあらわしたのは、賢治自身の問題意識の反映であるように見受けられる。定説となっているように、宮沢家が裕福な質屋であったことは賢治に深い罪業意識を植え付けている。質屋という搾取的な家業で財を成す父政次郎が浄土真宗の篤信であったことは、搾取のイメージと真宗とを結びつけるものとなったと推測できる。つまりこの狸の造形は、賢治が生家の家業と浄土真宗の信仰とを結びつける仕方で問題意識を抱いた証左であると看做すことができるのである。

以上『蜘蛛となめくぢと狸』において賢治が智学の真宗批判の影響を受けつつ、自身の問題意識を反映した造形を行っていたことを確認した。そしてこの肉食の点から真宗へと批判を行うという造形は、一九二三年頃執筆されたと推測される『ビヂテリアン大祭』にも受け継がれていくのである。次節ではそれを扱う。

三、『ビヂテリアン大祭』における智学の影響とその限界

この節では菜食主義者が集う架空の国際大会という構想を持つ『ビヂテリアン大祭』において真宗批判が行われた箇所に注目する。そこに智学の主張からの影響がみられることを確認すると同時に、賢治と智学の異なる点を明らかにする。

この作品は主に菜食主義に対する九つの批判と菜食主義者た

ちの反駁によって構成されている。ここではそのうち仏教理解にかんする第九の応酬に注目し、『妙宗式目』との比較を行う。

比較に入る前に、菜食主義者が集う架空の国際大会という構想そのものが智学に由来する可能性を指摘する。智学は一八八九年に『佛教僧侶肉妻論』をあらわし、そこで釈尊の禁肉戒を高く評価している。更には、萬国禁肉会なるものを組織したいという展望を述べている(6)。なおこの『ビヂテリアン大祭』の構想のもとして、工藤哲夫は一八九三年に開催された「万国宗教大会(7)」関係資料を賢治が手に取った可能性を挙げている(8)。以上をあわせ、本稿では賢治が智学の構想した萬国禁肉会と一八九三年の「万国宗教大会」を紹介する資料から菜食主義者の集う架空の大会を構想したと推測する。

次に第九の応酬の内容を具体的に検証していく。これは九つの論難反駁の最後におかれ、物語のクライマックスを構成するものである。まず批判者の博士が「クリスト教国に生れて仏教を信ずる所以はどうしても仏教が深遠だからである」と述べ、「自分は阿弥陀仏の化身親鸞僧正によって啓示されたる本願寺派の信徒」であると名乗る。博士は五種浄肉(9)や、釈尊が入滅前に豚肉を食べたという説(10)に基づき、菜食を行う仏教徒を「諸君の如き畸形の信者は恐らく地下の釈迦も迷惑であろう」と烈しく批判する。

この真宗門徒に対し、物語の一人称の語り手であり、菜食主義者である主人公は激怒する。そして「敬虔なる釈尊の弟子」として反駁を行う。主人公によれば批判者は「仏弟子でもなく仏教徒でもない」者であり、「特に腐敗せる日本教権に対して一種骨董的好奇心を有するだけ」である。主人公はさらに釈尊が臨終に食したのは豚肉ではなく蕈だと主張する(11)。また「仏経に従ふならば五種浄肉は修業未熟のものにのみ許されたこと楞迦経に明かである。これとても最后涅槃経中には今より以後汝等仏弟子の肉を食うことを許されずとされてゐる。」[八・二四一]と述べ、肉食は大乗仏教で禁じられていると主張する。

ここで注目すべきは、肉食を肯定する立場の仏教徒が真宗の門徒として造形されていること、及び当時の日本教権を腐敗したものと主張していることである。賢治は先に挙げた『蜘蛛となめくぢと狸』においても肉食を行う真宗僧侶とおぼしき登場人物を配置しているが、肉食と真宗批判を結びつける着想はこの『ビヂテリアン大祭』においても受け継がれている。ここでも涅槃経を根拠としていることなどから、智学による当時の日本仏教界への批判を念頭に置いていたことが推測される。

さらに賢治は主人公に輪廻転生観を根拠とした殺生の忌避を主張させる。以下にその台詞を引用する。

仏教の精神によるならば慈悲である、如来の慈悲である完全なる智慧を具へたる愛である。仏教の出発点は一切の生物がこのやうに苦しくこのようにかなしい我等とこれら一切の

生物と諸共にこの苦の状態を離れたいと斯う云ふのである。

（中略）だから我々のまわりの生物はみな永い間の親子兄弟である。異教の諸氏はこの考をあまり真剣で恐ろしいと思ふだらう。恐ろしいまでこの世界は真剣な世界なのだ。［八・二四一～二四二］

賢治はここで仏教信仰に基づく輪廻転生観を主人公に吐露させ、殺生と肉食の忌避の理由としている。智学は先に引用したように輪廻転生観に基づいて肉食を禁ずる理由を「自己よりも他を救ふに重きを置く傾向」のゆえであるとしているが、賢治がここで述べることもそれと類似点を見出すことができるものである。智学の肉食を肯定する主張に対してはどうか。この『ビヂテリアン大祭』において肉食が肯定される場合として説かれるのは冒頭部で菜食主義者を分類する際である。ここで「大乗派」と紹介されるものが、菜食主義者の分類でありながら肉食を行ってもよい場合について定義しているものである。以下にそれを引用する。

もしたくさんのいのちの為に、どうしても一つのいのちが入用なときは、仕方ないから泣きながらでも食べていゝ、そのかはりもしその一人が自分になった場合でも敢て避けないとかう云ふのです。けれどもそんな非常の場合は、実に実に少いから、ふだんはもちろん、なるべく植物をとり、動物を殺さないやうにしなければならない、くれぐれも自分一人気持ちをさっぱりすることにばかりかゝはって、大切の精神を忘れてはいけないと斯う云ふのであります。

究極の状況を想定した上で「泣きながらでも食べていい」という賢治独特の分類であり、食べられる動物への同情を強く説くものである。自身が肉となり食べられる覚悟を促すのは捨身飼虎等の仏教説話に影響を受けている可能性が高い。智学が肉食を可とする例外を認めるのは法華者であるのに対し、賢治はより多くのいのちを救う為にひとつのいのちを犠牲にする場合を説く。この点に智学と賢治の決定的な違いがある。

以上『ビヂテリアン大祭』における第九の応酬に注目し、智学の言説との比較を行った。第九の応酬と田中智学『妙宗式目』は、涅槃経や輪廻転生観を根拠に肉食を禁じようとする点で似通っている。しかし例外的に肉食を認める場合について、賢治はより多くのいのちを救うことにつながることを強調している点が智学とは異なる。肉食にまつわる智学の主眼は畢竟国柱会が既存の教団に優越することにある。それに対し賢治の主眼は、輪廻転生観を根拠にすべての動物が肉親に対するのと同じような尊重の対象となるべきだと拡張していくことにあるのである。

賢治が肉食の点から真宗批判を行おうとした童話作品は、管見の限り『蜘蛛となめくぢと狸』と『ビヂテリアン大祭』の二作品

のみである。次節以降では『ビヂテリアン大祭』以外に賢治が輪廻転生観や殺生と肉食の問題を示した作品を取り上げ、賢治が描こうとした理想の輪郭をあきらかにする。

四、輪廻転生観から導出される理想
―「すべての生きもののほんたうの幸福」―

この節ではまず三節で扱った『ビヂテリアン大祭』と同時期に描かれた〔手紙四〕を扱う。これは一九二二年十一月の妹トシの死を踏まえて描かれた作品であり、賢治とトシをモデルにしたと思われる兄妹が登場する。妹ポーセは死後カエルへと転生するが、兄チュンセはそれと知らずそのカエルを石で打って殺してしまう。ポーセはチュンセの夢にあらわれ、何故自分を殺したのかと問いかける。輪廻転生によればすべての生き物が親子兄弟であるということの恐ろしさを、非常に端的に表わした場面である。この童話は主人公チュンセが求めるべきものを以下のように提示して結ばれる。

チュンセはポーセをたづねることはむだだ。なぜならどんなこどもでも、また、はたけではたらいてゐるひとでも、汽車の中で苹果をたべてゐるひとでも、また歌ふ鳥や歌はない鳥、青や黒やのあらゆる魚、あらゆるけものも、あらゆる虫も、みんな、みんな、むかしからのおたがひのきやうだいなのだから。チュンセがもしもポーセをほんたうにかあいさうにおもふなら大きな勇気を出してすべてのいきもののほんたうの幸福をさがさなければいけない。それはナムサダルマプフンダリカサストラといふものである。チュンセがもし勇気のあるほんたうの男の子ならなぜまつしぐらにそれに向つて進まないか。

ここにおいて、輪廻転生観に基づいた殺生の忌避の意義は大きく拡張される。今生での肉親の姿のみを追い求めるのではなく、「すべてのいきものの幸福」を希求するべきだという主張の根拠におかれるのである。

賢治の創作における「すべてのいきもののほんたうの幸福」は、晩年に迫る時期まで手入れを行った作品である『銀河鉄道の夜』における「みんなのほんたうのさいはい」〔十・二六〕へも通ずる、非常に重要なテーマとなる。賢治は輪廻転生観に基づく殺生と肉食にまつわる問題意識を、智学が提示した国柱会の優位を説く枠組みとは異なる位相において継承し、発展させていったのである。

結
―信仰と科学の一致を目指すということ―

本稿はこれまで賢治が『妙宗式目』から影響を受けて肉食と殺生を結びつけて真宗批判を行ったのち、輪廻転生観を「すべてのいきもののほんたうの幸福」を希求する根拠におこうと主張するに至る軌跡を追った。今節では賢治が目指した最終的な理想を追うために、まず『ビヂテリアン大祭』における第三の応酬を確認し、次に『銀河鉄道の夜』を扱う。

先に扱った『ビヂテリアン大祭』において、動物への同情を根拠に肉食を否定する主張が行われた箇所は、仏教信仰に基づく第九の応酬以外にもう一ヵ所ある。それは第三の応酬であり、批判者も反駁者もその根拠を科学に求めるものである。この第三の応酬において、批判者は動物を「一種の器械」とみなす立場を表明する。これに対し菜食主義者は、程度の差こそあれ動物にも人間と同じように苦しみや悲しみを感ずる能力があると科学によって証明されていると反駁する。賢治はこの作品において仏教信仰にまつわる第九の応酬をクライマックスにおくが、それ以外に動物への同情を主張する立場をもう一つ登場させ、その根拠を科学におくのである。この意図は端的に信仰と科学の一致を試みた証左ととることができる。

賢治は『ビヂテリアン大祭』において殺生の忌避を主張するために、仏教信仰のみを根拠におくにとどまらず科学的な根拠を求めている。これについても智学が『妙宗式目』において宗教を科学と一致させようと主張していたことの影響を指摘できる。智学は西洋思想、西洋の諸科学に対して、それらの肯定的な要素は全て法華経が包摂するとし、自らの説く教義の絶対的な優位性を主張しているのである〔三・一三四二〕。しかし賢治は法華信仰と科学の一致について、智学の取り組みが十全であるとは捉えていなかった可能性がある。少なくとも肉食と殺生の問題について、法華者の肉食を肯定し食う者と食われる者に価値の優劣を定める智学の主張を賢治は受け入れていない。智学の示した「萬国禁肉会」等の構想を達成し、肉食の禁止を慈悲の実現と位置づけるためには、国柱会が日本の既存の教団に優越することを強調するのではなく、より普遍化可能性に訴える必要性を感じていたと推察されるのである。

賢治は智学の主張に感銘を受けつつも、それを発展的に継承し、より洗練することを自分の使命であると捉えたのではなかったか。賢治はのちに『ビヂテリアン大祭』の改稿を試みており、『一九三一年度極東ビジテリアン大会見聞録』〔十・三三八～三四三〕という未完の作品を遺している。後年に至るまで手入れを続けたことからも、この作品で描こうとしたものが賢治にとって非常に重要であったことが窺える。そしてその目標に信仰と科学を一致させることが含まれるのは、一九二四年頃から一九三一年頃まで執筆されたと推定されている『銀河鉄道の夜』の第三次稿において、直接的に信仰と科学の一致を説くキャラクターが登場するこ

とからも推測できるのである。この第三次稿の結末部にはブルカニロ博士という人物が登場する。賢治はこの人物に「もしおまへがほんたうに勉強して実験でちゃんとほんたうの考とうその考を分けてしまへばその実験の方法さへ決まればもう信仰も化学とおなじやうになる。」［十・一七五］「おまへの実験はこのきれぎれの考のはじめから終りすべてにわたるやうでなくればいけない。」［十・三三八～三四三］と発言させている。信仰と科学の一致を信仰の側から目指す意図をはっきりと示す台詞である。

本稿で明らかとなったのは、まず『妙宗式目』に影響を受けた最初期の賢治は、智学の影響を反映させながら真宗批判と肉食を結びつけて『蜘蛛となめくぢと狸』を描いたということである。続く一九二三年頃の作品である『ビヂテリアン大祭』でも肉食からの真宗批判は行うが、むしろこの作品では輪廻転生観を慈悲の根拠としようという意図が強まる。輪廻転生観を根拠とする慈悲の主張は［手紙四］においてとても顕著となる。また『ビジテリアン大祭』には信仰と科学を一致させようという萌芽もみられるが、これは最晩年の作品のひとつである『銀河鉄道の夜』においてあらためてはっきりと主張されている。

賢治が扱い続けた殺生と肉食の問題は、輪廻転生観を慈悲の根拠としようという主張へと発展する。その主張は科学的にも裏付けられうるものであるという確信を伴って、創作上で主張され続ける。殺生と肉食にまつわる問題意識が、智学に由来する真宗批判に留まらず発展し、「すべての生きもののほんたうの幸福」を希求する契機となるところに、賢治の独自性を見出すことができるのである。

※本稿における賢治のテキストは『【新】校本宮澤賢治全集』（筑摩書房、一九九六年～二〇〇九年）に依る。［巻数・頁数］の順に表記する。

註

(1) 一九〇三年から翌年にかけて行われた本化妙宗研究大会における田中智学の講義を記録したもの。賢治はこれを五回は通読したとされる。一九二三年の関東大震災の際に原本焼失するも、一九二五年に『日蓮主義教学大観』に名を改め再発行される。更に一九九三年復刊される。本稿ではこの復刊された『日蓮主義教学大観』を参照し、［巻数・頁数］の順に表記する。なお引用に際し、適宜現代常用漢字に改めた。

(2) 従来の賢治研究では智学の政治性ゆえ、比較検討が未だ十分に行われていない側面がある。本稿では智学の国体論には立ち入らず、その経典解釈が賢治に影響を与えたという側面に注目した考察を行う。

(3) 高知尾智耀「宮沢賢治の思い出」『真世界』一九六七年、二八～

二九頁。

(4) 梅原猛『宮沢賢治童話の世界　賢治の宇宙』佼成出版社、一九八四年、三二頁。

(5) 上田哲『宮沢賢治　その理想世界への道程』明治書院、一九八八年、六一～六四頁。

(6) 賢治がこの『佛教僧侶肉妻論』を手に取ったことがあるかは確認できないが、この論における展望は『妙宗式目』において紹介されている為、賢治が智学のこの構想を知っていたことは確かである。

(7) 一八九三年のシカゴ万国博覧会における世界宗教会議のこと。アメリカの自由主義神学者たちが中心となり、世界中の四一の宗教からおよそ二一〇名の代表者が参加した。日本からは禅宗の釋宗演等が参加している。

(8) 工藤哲夫『賢治考証』、和泉書院、二〇一〇年、三二一～三三三頁。

(9) 三種浄肉（殺されるところを見ていない、自分に供するために殺したと聞いていない自分に供するために殺したと知らない）に、自然に死んだ獣の肉と鳥の食べ残した肉を加えたもの。

(10) 南伝仏教では釈尊が豚肉を食べたという説をとる。北伝仏教では高齢の釈尊に肉料理はふさわしくないこと、トリュフのような豚が探すきのこを連想できることから、釈尊が臨終に食したのはきのこであるという解釈をとる。現在は文献学の発展により、豚肉であったことが主流な解説となっている。

(11) 賢治は豚肉であるとの解釈を「サンスクリットの両音相類似する」ゆえの誤りだとするが、この根拠は賢治の創作であると工藤前掲書において指摘されている。

（まきの・しずか　筑波大学大学院
人文社会科学研究科）